

はじめに

毎年の東京教区教役者研修会では、教役者自身の司牧、礼拝、説教などに関するテーマが中心でしたが、昨年度（一九九九年）からは、葬送儀礼についてキリスト教以外の諸宗教から勉強しようということになりました。

『生と死』のテーマは、キリスト教に限らず、あらゆる宗教が取り組んでいる共通の根本的課題です。従来はそれぞれの宗教、宗派が独自に取り組んできましたが、最近はできる限りお互いの協力によって取り組んでいかなければならない課題であることが自覚されています。一つの宗教で取り組みにはあまりにも重い宗教的課題のように思われます。

聖職養成委員会ではそのような思いから、死と葬儀礼拝について、当分キリスト教以外の宗教から学ぼうということになり、今回は最初の試みとして、浄土真宗から本願寺派梅上山光明寺の住職石上和啓先生、また築地本願寺に事務所を置く、東京ビハークでターミナルケアの働きに取り組んでおられる田久保園子先生をお呼びして、お話を伺うことになりました。理論面だけではなく、儀礼面、また実践面から感銘深いお話を賜り、改めて浄土真宗

の教えの深さに気づかされると同時に、独自の伝統の中での理解がいかに狭く限られたものであるかを痛感致しました。お二人の先生は、率直にまた親しくお話をしてくださり、愉快な交流と対話の時を持つことができました。

この小冊子はこのお二人の先生の講演を纏めたものです。石上住職、田久保先生に心から感謝しつつ、「生と死」の問題に関心を持つ兄弟姉妹の学習資料として利用されることをお勧めします。

主 教 竹 田 眞

目 次

はじめに	主教 竹田 眞		___	1
Session 1	竹田主教講話	11.22	夜	___ 5
Session 2	Meditation 井原司祭	11.23	午前	___ 17
Session 3	東京ビハーラの会			
	田久保 園子さん	11.23	午前	___ 29
Session 4	- Part II -	11.23	午後	___ 41
Session 5	梅上山光明寺住職（浄土真宗本願寺派）			
	石上 和敬 師	11.23	夜	___ 47
Session 6	- Part II -	11.24	午前	___ 57

Session 1

竹田主教講話

11.22 夜



今回は「死」ということについて、死に直面している人々への牧会について一緒に学びましょう。特に死の準備ということとは牧会でも大きな課題になっていきますし、また心理学的対応 不安なく死んでいく死についての学問 は大変発達してきているようですが、今回は宗教として仏教ではどのように考えるのかを研修しようとするものです。

最近マイケル・フォールという人が書いたヘンリー・ナウエンの伝記が出ました。非常に

おもしろく感激して読みました。このことから話を進めたいと思います。

彼は 死ぬということ dyingということ 死んでいくこと を野球のキャッチャーに対して球を投げ込んでゆくように、自分を投げ出して自分で神を捕らえようとしないで、神があなたを捕らえてくれるのだ、そのことを信頼していくことだということです。

伝記は『Wounded prophet (傷ついた預言者)』という題なのですが、ナウエン自身が逆説的な言い方ですが、wounded healer (傷ついた治癒者) といわれます。二、三年前にこの研修会で読んだ本『イエスの御名で』の中にも wounded Jesus (栄光のイエスの姿)、よみがえったイエスの姿こそ傷ついたイエスだという個所がありました。

東京教区宣教方針である「最も小さい者に出会い仕える」、というときに根本的にぶち当たる問題は、泣く者と共に泣き、泣いている最も小さい者と共にいられるか、ということです。我々特に教役者は教える立場であり、聖別する立場ですから特に主教職はマジステリオン、教導職、マスターですから、小さい者になれない立場なのです。ですから、イエス、最も小さい者であるイエスに仕えることができない。根本的な問題として何時でも突き付けられるわけです。最も変えることができない自分の在り方が一方にあり、一つになれる手掛かりとして、イエスをみたり、ナウエンの本を読んだり、生き様をみたりすると、傷つくこと

が一つになれる手掛かりではないかと思つたのです。

傷つくことができる、傷つきやすさ(vulnerability, vulnerable)、教役者またクリスチャンとして傷つくことができるのか。自分で傷ついたような体験をしますが、その時に傷つけた人を設定してしまったり、恨んだり、責任を負わせたり、許せない者を作ってしまったりします。そうすると折角傷ついているのに、その傷が非常に観念化してしまったり、無くなってしまうことがある。どうしても自分の傷として受け入れられない。傷つくことができる対象ではなくなってしまう。そういう心理作用や心理作業を心の中でしてしまふ。ですから傷つくことができるという自分の在り方をナウエンをみると学べるのではないかと思ひます。つまり、傷ついた預言者、傷ついた治療者、傷ついたメシヤ、傷ついたイエスを考えることが、傷つきにくくなっていく自分、傷つかないようにする行動ができあがっている、そういう近代の神学教育がいろんな挑戦を受けるわけです。人生の危機やいろいろな人の相談にいかに対応するか、方程式を学ぶわけですが、その時に、自分も傷つかないで対応できる、技能、理論あるいは解答の言葉を学んでしまいます。防衛技能を強化してしまいます。

そういうわけで傷つきにくい defense をなくし、傷つきやすくなるのが、泣く者と共に泣くということが出来るイエスの姿に做った牧会者のあり方に形成されていくのではな

いかと思います。ナウエンは傷つくままに動いたと思います。防衛することを拒否した生き方をしてきたことがよく判ります。彼は世界的に有名になる前、七〇年代、八〇年代、世界の方々に講演をしています。私も聴いたことがあります。私も霊的な指導者であります。多くの人が彼の助言を受けて救われたという体験をしています。そして傷が癒されたという体験をしています。

彼の講演には何千何百と集まって来ます。彼は単に座って話すのではなく、身振り、手振り、目付きで聴衆を魅了するような話し方をする生れながらの俳優、アクターだといわれます。しかし、多くの人が救われるのですが、彼の親しい友人の言葉として、「時々講演が終わって、ホテルの部屋に帰ると彼はもう悲しい道化師のように一人で沈んでいる姿をよく見た」と言います。そして、そういう人だから、霊的にも信仰的にも精神的にも成熟した人のようにみえるが、全く反対の人で傷ついた精神的にも不安定な人で自分の部屋に引き籠もって悲しい顔をして座っていた」と。

彼の傷ついた人を癒す力というのは、霊的に優れた人、成長した人というよりも、彼自身が霊的に傷ついた人であったからだと思います。彼自身言っています、「他人の傷ついたところに近づくことができるのは、自分自身の傷ついている部分からだ」というわけです。

傷もない、完全な者として理論もカウンセリングも勉強してどんな悩んだ人が来てもよいようにでき上がった人ではなくて、いつもそれができないという自分の傷の部分から他人の傷に届くことができます。イエス自身が栄光ある復活した姿であってもその生々しい手、足、脇腹に傷をもつ姿です。

気付いた人もいるかと思いますが、ナウエンは同性愛者、ゲイでありそのことで悩んでいました。カトリックの司祭として召命に応えるという霊的な側面と同時に非常に心理的な痛み、内的な葛藤を持っています。これが彼の本だとうまくつじつまがあっていますが、自分の生き様は心理的な調和はしていない。いつもidentityの問題をもっています。彼は七〇年代にはいわゆる牧会学の教授として学問の世界にいましたが、八〇年代には世界的に有名な霊的指導者であるC・S・ルイス、トマス・マートンと同じように有名な霊的カトリック司祭になっていきます。七〇年代、イエール大学にいた頃はゲイ、レスビアンなど同性愛者をサポートしていましたが、八〇年代になるとカトリックの伝統的な教えに戻ってしまいます。非常に厳格な否定的な態度をとるようになります。しかし一方において彼の内心は安らかでなかったのです。そして八〇年代の終わりになるとノイローゼ神経衰弱に陥る。これは自分の中に整合性 identity がなくなってしまうため、有名なラルシュに行ったのは

その後です。そこで安らぎを得たと同時に人と親しくなれなかつたたのですが、その間もノイローゼになる程の内面の葛藤状態にありながら、彼の言っていることはますます有名になってきます。以前読んだ、イエスの御名で「も八〇年代の終わりに肉体と霊の葛藤の中にあつて非常に傷ついている精神状態で書かれたものです。

この本（Wounded prophet）は第一章「Heart（気持ち・心）」、第二章「Mind（知性）」、第三章「Body（身体・肉体）」、の三章に分かれています。彼の表現は非常に率直で、非常にプライベートなことまで書いてしまうので、編集者に削られたり修正されたりしたらしますが、彼の考え方は最も個人的なプライベートな問題こそ人間の普遍的な問題につながり、皆でshareしあふことが必要だという思いがあつたのだと思います。そういうことで『Wounded Prophet』という題がつけられて、彼こそ傷ついた預言者ではないか、多くの人を癒したことは、彼が霊的な技能が優れた人ではなくて、やはり彼自身が傷ついていた人であつたので、同じ傷、同じ悩みを持つ人に近づくことができたのではないかというわけですね。そういう意味で傷つくこと、傷つくことができること、これが一つ私たちの根本的な立く者と共に泣くというきっかけ、手掛かりではないか…これはイエスの傷とつながっていくと思います。

イエスこそあらゆるいと小さな者たちとidentityできた方だと思います。我々はイエスに従って牧会をしようとする時、如何にして十字架の傷を受けることができるか、イエスと共に十字架を負うことができるかが相変わらず我々の問題の再確認です。どこかに私たちの使命について再確認したいとありましたがそういうことだと思えます。もう一つ、預言者というのは、例えば第二イザヤの「僕の歌」をみると「私たちは彼の傷によって癒された」という言葉があるが、エレミヤにしろホセアにしろ全ての預言者は傷を負っていたのではないかと思えます。ですからイエスの準備としての役割を果たしてきたと思えます。

もう一つ本を紹介したいと思えます。私が神学校で牧会学を教えていた時にこの本を使ったこともあるのでご記憶の方もあられるかもしれませんが、『病いの声 (Voice of illness)』という本で ARNE SIERALA というフィンランドの人が書きました。

彼は私が最初にユニオン神学校に留学したときに、若い講師として海外から来た学生の歓迎会で隣に座っていた人でした。イエスの「よみがえり」の問題について取り組みたいという話を語ったところ、彼も同じような興味を持ち論文を書いていました。彼は心理学者であり、神学者でありパウル・ティリツヒの弟子でした。彼がどういっつかけてこの「病い

の声」に取り組んだかという点、第二次大戦が終わったときに、アメリカと英国の医者や心理学者がチームを作ってナチスの収容所に行って、ユダヤ人の生き残った人々を尋ね、大変な状態にいた人たちを救いだして、社会に復帰させようと、解放、治療に当たったのだそうです。そのうちに一人の医療班の医者が収容されていた人の中で割り切った人たちの心理状態はちつとも変わらないことを発見しました。彼らのやったことは、面接して診察しグループにわけて、分類し、アンケートを出し、答えを出すということをしていたのですが、このやり方では社会に復帰できない、リハビリテーションができないことを発見しました。彼らはこれは結局、コンセンストレーション・キャンプと同じやり方だと気づきました。そして全く逆の状態を作ろうとしたがこれも失敗しました。ある軍隊の指導のもとに大変に権威主義的な所長が来て、全く逆戻りしてしまう体験をし、そこから問題提起をします。回復を願うところから「アドバーシエム」(場所と名前の意)と名付けられましたが、それと全く同じことが近代の病院、心理療法、臨床心理は分類していくのですが、結局は癒しがないと彼は言います。

病氣、病いを負うということは、一つの病いはメッセージを持っており、ある一定の社会、グループに対して何か言いたいことがある、その社会の病気を指摘しようとするという

ことだ：病気は個人的に起こるのではなくて、一人の人と社会の間の歪曲された関係、その関係が病的なのだ、という。それに対して適切なコミュニケーションを持ち、適切にメッセージを受けいれた時に病いが癒されるというのが彼の主張です。特に精神的な病気にかかった人をどう社会が扱ってきたかという歴史を調べると、病いのメッセージを消してしまふことをずっとしてきた。保護、治療として社会の方は健康な癒す力を持っていて、不健康な状態を癒せばよい、施設を作つて収容してしまえばいいという形で、声を、メッセージを聞こうとしない状態になつてしまふ。その問題を彼は指摘するわけです。病いには正しいコミュニケーションに戻そう、和解の關係に戻そうとするメッセージがある。これが病いの声であり、これはまさに預言的な声を持っています。我々は今の社会からこのような声を排除し、聞くことをせず、打ち消そうとします。そういう形で治療（therapy）をしようとし、病的な社会にrehabilitatoしようとしています。このプロセスがまさに現在の社会であり、彼はこの癒しの仕方を問題提起しようとした。

様々の「病いの声」について、教会はこれをいかに打ち消すか、正すか、という姿勢にどうしてもなつてしまいます。その中で教会の役割り、宣教の役割りはどうあるべきか、どうしたらよいのか：泣く者と共に泣くというイエスの言葉を私たちは簡単にできると思ってい

る…預言者の働きをみていくとそういう問題があるのではないでしょうか。

昨日の福音書の中の、この中で最も小さい者にしたことは私にしたことである。最も小さい者にしなかったことは私にもしなかったことである」というイエスの最後の言葉は、マタイの前後関係から見ると一般的に言っているのではなく、宣教師、イエスが派遣した弟子たちに向けて言った言葉です。弟子たちの中でも当時使徒の在り方を受け継いで貧しく、托鉢しながら宣教していく、定着を嫌う宣教集団（wandering charismatic）があり、一方において教会が拡がってエルサレムに定着した教会ができてきます。同時に両者が共存していました。恐らく、いと小さき者とは彼らのことを言っているのではないかと私は思いますが、特にペテロ、ヤコブなどは定着していくと、最初は定着した教会が彼らを支え、救けていた関係であつわけですけれども、次第次第にうつとつしくなつてきます。今のホームレス、放浪集団はどうしても邪魔になり、段々抑圧されて定着した教会だけが発展し残つたのだと思いき。

「病いの声」が出るような所をつぶして、抑圧していく。こつこつ傾向は特に近代の医学に強いのです。病気は個人的な一人の人のもので、どう直していくかだけが問題で、病いから出る声は打ち消されていくだけです。

病者というのは病者を見る方の側の社会的病的な状態、これの反映であるとして、それを指摘するのが、病いの声」です。まさに預言者だと言います。いろいろ批判もあるが尊敬するナウエンと共に紹介したいと思います。

こういう人たちの指摘は、我々の社会では、小さい者と共に泣くということとは不可能に近いような状態の中で、傷つくことで一緒になれるという希望、光を与えてくれます。非常に霊的な洞察を持っている。これが彼の貢献だと思います。

今、同性愛の問題が非常に議論されています。聖書では、罪人、不道德として癒さなければならぬ強い議論があると同時に、同性愛でも神の子だ、受け入れるべきだ、教会のメンバーが受ける恵みは当然 share できるとする議論のある中で、ナウエンはそういう議論を越えた所で預言者的な発言をしているということが言えると思います。ナウエンには取り組んで頂きたいと思います。

彼の最後に書いた『Inner voice of love (愛の内的な声)』 九六年、亡くなる年に書いた本があります。これで始めて肉体を自分のいるべき所に戻す (bring your body home) という言葉を使います。霊的なことは極めて肉体的な意味合いを持ち、切り離すことはできない

：創造論からも受肉論からも信仰とか神学的な考えからも二元論になるのですが、これを克服する近代を越えた方向を見つけたことが今の宣教の課題ではないかと思えます。

大畑くんから課せられた「今日の宣教と私たちの使命」はそのあたりにあると思えます。これは聖職養成委員会主催の研修会ですが、やはり牧会の準備、牧会の訓練をするということとは一体どうということなのか、神学問題が改めて現代問いなおされている時ではないかと思えます。

もう一つ今回の試みのように特に仏教の教えについて学ぶことは大ことなことであると思えます。それに日本古来の死生観をもう一度見直すことが大切なことなことであると思えます。そういうことを学びながら死に直面する根本的な negativity、否定である死と死に直面することをどう考えたらよいか：私たちが自身への牧会として傷つくものとして進んで行けたらと思えます。

Session 2

- Meditation -

井原司祭

11.23 午前



聖書を読む前の祈り

わたしたちを教えるために聖書を記させられた主よ、どうかこれを聞き、これを読み、心を込めて学び、深く味わって魂の養いとさせてください。また、み言葉によって強められ、耐え忍ぶことを習い、み子によって授けてくださった限り

ない命の望みを抱き、常にこれを保つことができますように、み子イエスキリストによってお願いいたします。アーメン

最初に一言お詫びをしておかなければなりません。昨日の主教さんのお話の時に、つい調子にのって、主教さんの傷はなんですか」と聞いて、隣にいた田鶴さんに叱られてしまったのですが、親しい交わりの中で、失礼だとは思いますが、お答え頂ければと申し上げました。「主教になってdefensiveになったことだ」と主教さんらしいというか、率直なお答えを頂きました。お答えを頂いたにもかかわらず、私が何も言わないのは大変失礼なので、ここで皆さんにお詫びを申し上げると同時に、私の傷は何か、一九八八年の例の在日韓国人神学生に対する差別発言を巡って、皆さんから、特に主教、今井先生、田光先生からいろいろ示唆をいただきながら皆さんに支えていただきながら、それに取り組んで来て以来ずっと、私の中に大きく巣くってきた傷、主教はdefensiveになったとおっしゃいましたが、私はもう一つ傷が深いというつもりはないのですが、逃避的といいますが逃げ腰、何か公けの所でお話をすることをできたら避けたいと感じていたことを思い返しています。そのことを皆さんに率直に告白して、聖書の指導はできかねますが私に課せられた務めを果たしたいと思いま

す

今回の聖職養成委員会の宿泊研修会の課題にそって何がいいか たり着いた結論は主イエスが十字架の上で最期をおむかえになった時に、口にされたと聖書が記している十字架上の七つの言葉ではないかと思っています。

私は死を直前にした患者さんに何か話をしてくださいと言われて、この言葉が患者さんにとって力になったという例を取り上げたいと思います。回りくどい前置きになりましたが、なるべく短くお話して皆さんの黙想の手がかりとしたいと思います。

これは、聖ルカ病院に在勤していた時の話です。ある日、ナースステーションからチャブレンに会ってもらいたい患者さんがあるということで電話をもらいました。すぐに病室に向い、ドアをノックしました。こんな格好をしていますから、牧師ということはずぐ判つたと思います。既に顔に黄疸が出ている六〇歳の肝臓がんの男性でした。「先生、救ってください」「どうなさったのですか。」「私は今怖いのです。夜になると病室の角に死霊が現われて、『こっちにおいで、こっちにおいで』と手招きをする。私はベッドの柵をぐつと握り締

めて、『嫌だ、そっちに行けない』と言っんです。まんじりともしないで夜が明けてくると、バルコニーから身を投げて自殺したいという衝動に駆られるんです。何とか助けてください……。こんなふうに言われました。そして、「何か話をしてください。」と。「夜、不安に襲われて、死霊の招きに一生懸命抗っておられる。そして、明るくなると自殺したいという自殺願望に駆られる。そのお気持は判るような気がします。私はこんなふうに答えました。この方がどうい方であるか何も判らないので何を話したらよいかためりました。「あなたの歩んで来られた道をお話してくださいますか」と尋ねました。病気の重篤な人に酷だという気もしましたがお願いしました。彼は意外と元氣そうにそれ迄のご自分の歩みを語ってくれました。

彼は一八才までハワイで過ごし、太平洋戦争が始まる直前に故郷の中国地方の県に帰国。その土地の旧制の中学から建築関係の専門学校に進学。日本語に変な抑揚をつけて話すので仲間の学生から疎外されました。ところが戦争が終わって、彼にとって事態が一変する。英語が堪能で、建築関係の知識を持つ人物として大変重用され、建築会社の社長に見込まれてそのお嬢さんと結婚しました。軍需の仕事が無くなり、義父の会社を手伝った後、大手の建築会社の海外渉外担当の営業部長という要職についた。海外にいて身体の具合が良くないの

で、早く帰って精密検査を受けたいとずっと思っていて、漸く帰ってきて、診察を受けたらこの態だということでした。

彼が歩んできた道を聞かせていただいて、大変な波瀾万丈の生涯、歩みだったんですね」と。その日はお疲れもあつてそのまま失礼したが、病室を出ると、奥さんが後を追いかけてこられて、主人は今まで自分の青年時代のことは何も話してくれませんでした。今日先生に話したのが初めてです。私も判ったことがたくさんありました」と言われました。

二日後、ドアを覗くと目ざとく見つけて喜びの表情を満面にたたえていた。さらに二日後、至急私に会いたいというので病室に行きました。「何か話してください」という。ハワイ在中に教会に行ったことがあるかと聞いたら、イエスという方のことは記憶にあるということでした。私は瞬間的にいろいろ想いを巡らせて、イエスがこの地上を去られる時に、十字架上で語られた七つの言葉について話すことに決めました。

第一の言葉 「父よ、彼らをお許し下さい。自分が何をしているか知らないのです。」

(ルカ二三・三四)

死刑執行の兵卒だけでなく、まさに全ての人々のための執り成しの祈りをしてください。さったのだ。

第二の言葉 「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」

(ルカ二三・四三)

「イエスよ、あなたのみ国においては、私を思い出してください」と言った謙遜な犯罪人の言葉に対するイエスの言葉。

第三の言葉 「婦人よ、ご覧なさい。あなたの子です」「見なさい。あなたの母です。」

(ヨハネ一九・二六)

聖衣をめぐつて余禄に与ろうとする兵士たちの様子を見下しながら、母の労苦の結果が退屈凌ぎに使われている。それは主イエスにとっても辛い思いであり、母マリアの心情を思つてのみ言葉。

第四の言葉 「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ。」

(マタイ二七・四六)

イエスがマリアを呼んでいるとも、絶望の叫びを挙げているともとれるが、幼い頃から教えられている詩篇一二篇の冒頭の言葉。

第五の言葉 「渴く」

(ヨハネ一九・二八)

磔刑の肉体的な苦しみ、ご自分が成し遂げようとされた全ての人々の救い、霊を求めたの渴きを口にされました。

第六の言葉 「成し遂げられた」

(ヨハネ一九・三〇)

神から示された目的は完成しました。

第七の言葉 「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます。」

(ルカ二三・四六)

イスラエルの子供たちの就寝前の祈りの言葉でもあります。

主イエスの十字架上の七つの言葉について話をして神様が共にいて、あなたの歩む道筋を照らしてくださるようというお祈りをしました。すると彼は、有難うございました。これ

で安心して逝けます。」と落ち着いていました。その時、ある意味で私の方がショックでした。イエスが実際に口にされた言葉が、様々な状況の中にある人々に、直接その力が伝わって行くのではないか。力付けもし、励まし、慰めもすることを、逆に私が患者さんから教えられたように思います。一つのこと例として受け止めて頂ければと思います。

それから四時間後、この方はこの世を去られました。話しをした時には奥さん、お子さん、お孫さんも病室にいらして静まりかえって皆で聞いていてくださった。主イエスのみ言葉は、贖いの業は全人類のためであってキリスト教徒は、占有、独占していると思っっているが、渴いた霊が求めているのであれば、全ての人々に贖いのみ業の結果として語られたものと受け止めてよいのではないか…と思います。

この方の後日談は何も判らないのですが、当時聖ルカには四つの内科病棟があり、臨死の患者さんの状況について共通の理解を持つことが必要だということで、毎週木曜日にターミナルケアのカンファレンスを開いていました。その席で看護婦から、この患者さんの態度が一八〇度かわって落ち着かれたけれども、「どんな話しをされたのか」と聞かれました。私は「私の訪問をどう受け止められたか聞いているか」尋ねたところ、「私の言っているこ

とを信じてくれた人がいた」と患者さんが言われたということを知りました。

本当に死霊があらわれ、昏間は自殺願望に駆られるなど幻想、幻覚だと決めつけられがちだが、患者さんの内面ではいろんなことが起こっています。起こることを知らないだけで、また知ろうとしないで、そんなことは起こり得ないと排除しているのではないか……。私は患者さんの傍らに座って、患者さんの語る話を聞くことが大切だということをお伝えされました。

ルカによる福音書第八章一八節に「どう聞くべきかに注意しなさい」という言葉があります。私たちは聞く時に、自分の方の価値観を前提にして、受け止められるものだけを受け止め、受け止め切れないものは、私にかかわりのないものとして捨て去ってしまうということがありはしないか、自分が聞く能力範囲をこえていけば聞かないことになってしまう。能力範囲をどう広げていくかが課題なのではないかと思えます。

黙想ということですから、いろんな場面が設定されます。聖書の中の何処をとっても良いと思いますが、そのみ言葉の中に自分を置いて、どう答えることができるのか、自由に思い巡らしてほしいと思えます。

もう一つ付け加えたいことがあります。

私がアメリカの神学校に留学していた一九六四、五年にエリザベス・キューブラー・ロスの「死ぬ瞬間 (On Death and Dying)」が出版されました。「Living Lesson (生きた教訓)」として新聞、「ライフ (LIFE)」に写真入りで特集記こととして出ていたことを思い出します。

その本が一九七一年に川口正吉さんによって邦訳されました。彼は二〇才のお嬢さんを白血病で亡くした後このロスの本に出会った。『自分の専門は臨床心理ではないが、どうしてもっと早くこの本を知らなかったのかを悔いた』と、あとがきに書いておられます。

「患者さんは何に飢えているか。患者さんは生きたコミュニケーションを求めています。そうした患者さんとコミュニケーションするためには、まず、私たちが自らの死の恐怖を捨て去らなくてはならないと思います。そのような人が側に座ってくれているだけで、患者さんは無限の安らぎを覚え、平和と尊厳の中に死ぬことができるのです。ここにおいて私たちは私たち自身の死の恐怖を克服し、確固とした死生観を把握することがただ単に自分のためではなく、むしろ死んでゆく肉親また隣人のためにもなり、翻って自分自身の充実した充電された生のためでも在ることを知るに至るのであります。」

このような言葉を手がかりとして神様が私たちを媒体として何を語ろうとし、どう聞か、そんなことをこの時間に思い巡らしていただければと思います。

Session 3

東京ビハーラの会

田久保 園子さん

11.23 午前



一三年以上になりますか、「がん患者と家族の語らいの集い」という、がん患者と家族、遺族、医師、看護婦さんとずっと続けている会がございます。そこに、平成九年の桜の頃に「愛の家」の活動について大畑先生にお話に来て頂きました。そのご縁が今日ここにつながっているわけで感謝しております。皆様の大切な研修の場に如何程のお話ができますか、恐縮しております。

私にもしお話できることがあるとすれば、その会を縁として、あの近くに国立がんセンターがございまして、そこで直接患者さんのベッドの側にお話を聞きに行くことをずっと続けておりまして、その中で感じたことなどを少しお話させていただこうかなと思ってお伺いいたしました。大畑先生、今日はお見えではありませんが佐々木先生にお会いしたくてこのこやってきたのが実情でございます。

お話を苦しみとか悩みを聞く時に、その苦しみの解決を私が晴らしに行くのではなくて、苦しみを聞くことが大切ということに気づいたということが、今日お話したいことの一番ポイントで私が生命というものをどのように受け止めているか、その基盤にたってお話を聞くことが大切であるうとその所をお話したいのです。

人間の苦しみ、悩みというものは人類が始まって以来、基本的には変わっていないと思います。二五〇〇年前、お釈迦様が世に出られた時も、二〇〇〇年前にイエス様が世に出て、その解決法を世に伝えて下さった時も、現代も人間の苦しみ、悩みは基本的には何も変わっていない。ただ近・現代と申しましょか、物質科学文明がどんどん発達して複雑化されて、苦しみを見ないようにすれば、しばらくは見ないですむという人間の錯覚を起こさせる

状況があります。基本的な苦しみ、つまり四苦八苦と申しますように、生・病・老・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦は人類が続く限り変わらない。しかしながら技術の進歩によって苦しみがないように、ただ引き延ばしている。それでもなおかつ、ごまかしごまかしても最終的には死ぬ苦しみ 第三者の死は認めても、身近かな死、我身の死に至った時に科学的で論理的な思考法では解決できないので、そこで行きづまってしまふ。つまり、死を忘れて、浮かれて、現代人のほとんどは死を知って苦しむ。死を越える道、つまり生・死を越える道を、お釈迦様やイエス様が解決法を示してくださったものに背を向けているのが現状ではないかと思えます。宗教、宗教的なものに対する反感というものがこれ程強い時代はないのではないか：我々僧籍に在る者の責任は勿論沢山あると思いますが、宗教が誤解され、それに背を向けられているというのが現状だと思つのです。しかし、宗教の本質というものは、生命そのものがいかなるものかそれを明らかにしてきました。知識では解決できないものを明らかにしてきました。

聖書の中で一番好きな言葉は「神は生命なり」という言葉です。「アミータ」とは限りない生命という意味でございます。宗教的なものに対する反感の強い現代でキリスト教、仏

教、他の宗教の違いを語るのではなく、その共通の基盤にたつて人間の苦しみを解決するというそこに立ちたいという願いを持っています。

生命、宗教の本質は何かを皆様方に申し上げるのは、お恥ずかしい釈迦に説法ということになりますが、カントの時代にドイツの哲学者、神学者であるシュライエルマツハーの、無限のものに対する絶対依存の感情、ここに今いる私の生命が限りないものの中にすでに包まれているという感情が宗教の本質だという言葉に出会い、今日、皆様方とお会いしてお話できる共通の基盤があるではないかと思えます。限らないものの中に包まれている生命、つまり不安、変化する我々の肉体が、すでに限らない生命につつまれている、このことがここでの共通基盤でもありますし、私が苦しみ、悩みの中にいる方の側に行つて話を聞く時の基盤になっています。

宗教者が陥り易い失敗は、生死の問題で苦しみ悩む人がいると救いの方法を急いで伝えたということでした。しかし、それでは本来的に宗教に反感を抱いているほとんどの人にはドアを締められてしまいます。それをやった途端に、やっぱり僧服を着た人は嫌だと反発に会つてしまうと経験上感じていることです。つまり話を聞く側が、苦しみ、悩みを話せる人

間かどうかが問われています。この一〇余年間の私の表現を使うとすれば、蓮の花の中に私も話をする人も聞く人も一緒に座っているというイメージをもってお話を聞かせてもらっているということでございます。具体的な言葉にすれば、側に行った時に善し、悪し評価をしない心をもって、人生を生きている者として同じだという共感する心をもって、そして、相手を信ずる心、本質的にすでに包まれているわけですから、私が仏法をといて気づかせるのではなくて大いなる力の方から働いて、気付かしめるので安心して聞いていよう。どんなに時間がかかってもその時が必ず来るといふ、言葉にすればそついうことかと思えます。

私は九州佐賀の浄土真宗の寺に生まれ、ずっと寺で育ちました。学校も仏教系でございました。その後、会社員と結婚いたしました。ずっと普通の主婦でございました。けれども子どもが中学、高校と手が離れまして、子どもに伝えたいことは何かと思つた時に、「生命」というものの受け止め方を親から伝えられたので、私もちゃんと伝えたいと思ひ仏教の専門学校に入りました。卒業していわゆる僧籍を受けました。ちょうどがん患者との話合いが始まった頃で、先程申しましたように、張り切っておりますので、してはいけないことをやらないわけです。最初の頃にそれを見事にびしやりと止めてくださる方にお会いすることが

できました。

お会いした何人目かの方に雪山先生という浄土真宗の僧侶であり、産経新聞の記者でもあった方が大腸がんでがんセンターに入院されていました。お寺は富山ですが、雪山先生はその当時四六才で、ベッドの中で、ある宗教者の「がん体験」を連載されておりました。皆様の中にもお読みくださった方がおいでになるかもしれません。ちょうどそういう時期にお会いすると、「田久保さん、昨日ね、本願寺のお坊さんが衣を着てここにやってきてね、来るや否や、何もかも阿弥陀様におまかせして」という。そんなに簡単に何もかもおまかせなんてできないよ。自分は仏教者であって、人にも法話をするし、新聞にも書くけれど直りたいい気持ち、死にたくない気持ちというのは、そんなに簡単におまかせなんてできないよ。あれを言っちゃおしまいね、そばに来てもらうのも嫌。だから人の側に行った時は黙って聞いている。ぼんぼん苦しみ悩みを放り込める「ごみ箱」になったら良いと思うよと。それから入院を繰返されて富山の方で往生されましたが、その雪山先生にお会いできたお陰でその後、沢山の方にお会いしてお話を聞くことができました。その中で今年の三月までお会いした山下よし子さんという方のお話をしたいと思います。

山下よし子さんは五〇代半ばの方で、お嬢さん二人、ご主人は小学校の校長先生という方でした。最初にお会いした時は、三年位前、私の親友が同じ病室に入院しており、ちょうど会報ができましたので、それを持ってお見舞に行っておしゃべりをしておりました。友人が退院してもずつとがんセンターに行っておりましたので、彼女が入院していれば会うという関係でした。彼女は柏の役所の保健の管理職の方で、ただの保健婦さんではなくて指導する立場の方でした。病いに苦しむ人に自分がどんなに役にたってきたかを二年一〇ヶ月ずつと聞いてきました。すでに子宮体がん、卵巣がんが再発して肝臓、リンパ節に転移して、その度に抗ガン剤で押さえていくわけですが、その間も民間療法を受けに仙台に行かれたり、職場に復帰されたり、凄い方でした。

生まれて来た以上如何なる人も死ぬのであって、当たり前、自然のことだと思っ方がまさに少数意見で、死に直面して、怒り狂うのが世間一般なのだということを彼女を通して知りました。最後の入院の今年の一月にがんセンターが新しくなりまして、そこを歩いておりましたら、「田久保さん」と呼ばれました。「入ってきたのよ」。個室におられて、苦しい息の中から「待っていた、聞きたいこと、話したいことがある。処置室から戻るまで帰らないで」。戻ってこられると、いつか四人部屋にいた時、風船の話をしていましたよ。会報か何

かに書いていたよね。あれをコピーして持ってきて欲しい。そして風船の話詳しくして欲しい。」ということでした。その風船の話とはこういうことでした。

私自身の子供の時の経験なのですが、私は太平洋戦争が始まった年に生まれ、まさに戦後の栄養失調の後遺症と思いますが、九歳の夏休みの一日前の臨海学校の健康診断で肺結核ということで絶対安静を言い渡されました。退院後も寺の離れで一人天井を見て寝ている日々を過ごしました。境内で遊ぶ子どもたちの声を聞きながら涙を流し、子どもなりに死んでゆくのだと毎日考えるようになりました。

その時の死のイメージというのは、近所にあつた昔の古い井戸の中に自分が落ちていく何処まで行っても真っ暗闇の深い井戸の中に落ちていく。その恐ろしさ、恐怖に真夜中に悲鳴をあげたと思うのです。その時に父が、色とりどりの風船を膨らませて、話してくれました。「空気が一杯入っている風船は赤い風船はお姉ちゃん、青い風船はお父さん、白い風船はお母さん、紫のしわしわの風船はおじいちゃん、パンパンにふくらんだ風船も針でちよんと当たるとパンとわれてしまうけれど、中の空気は外の空気に合流するだけだよ。生命も同じだよ。大きな大きな生命の中に人間の一人一人の生命も外へ出ていくだけ。身体がもしや

亡くなつても、形は変わつても、中の生命は外の生命と一緒に合流するだけ。そして大きな生命がまた新しく生命を創る働きになるのだよ」と……。その話を聞いた時に怖い怖いと思つていた暗い死が、二年間、誰も見舞いにも来てくれない価値のない者だと思つていたのが、一瞬のうちに目の前の蔵の壁がぱつと開いた思ひでした。

この話を彼女にして、私の生命についての受け止め方は、九〇一〇才の時と今と何も変わつていないと話しました。山下さんは、自分が最初この話を讀んだか、聞いたかした時は『何を言つたか』と思つていたが、ここ何日かの間に『あー、そうだったのか』『あの風船よ』と気づいた。それで『こういうことだったのよね』と話したくて私を待つていてくれたのでした。山下さんが生命というものが肉体の中に閉じ込めてあるような小さな物ではなくて、大きな生命の一部分だということに気づいて、それを話したい時に周りに聞いてくれる人がいない。その時に私がちょうどやって来て嬉しいということを話された。そして、この話をご主人と二人の娘さんと、いろいろな問題を抱え、新興宗教に凝つてゐる姉にも詳しく話して欲しいということでした。翌日、家族の皆さんに同じ話しをしました。ご主人はこの話を是非生徒たちにも話したいといわれました。それまでなかなか病室に来られなかつた二〇代の

娘さんたちもその後殆ど毎日病室に来られるようになりました。次の週には柏のケアセンターに移られ、私がそちらに出かけるようになりました。そこはそれは暗い、話し声もしないシーンとしている所なんです。なぜかその病室だけは明かるいんです。のんびり食べたり、娘さんたちに怒るべきことは怒ったり、尾瀬のビデオを見たり、『夏が来れば思い出す』を皆で歌ったりしました。

山下さんは、自分はずっと医療者側にいて、生命＝肉体であり、一秒でも延ばすことが使命、目的だと思ってやってきた。もう少し早く気がつけばよかったのに、やっとここにきて気付くことができた」と…。

お葬式の後、「人間はがらりと変わることがあるのね、後がもつと寂しいかと思っていたけど一緒に生きてるように感じる」とはしみみおしつやった娘さんの言葉でした。

このようなことがいつもいつも起こるわけではありません。生命を肉体に限定し、死んだらおしまいと思っている(特に医療者側に多いのですが)中で、たまたまそのことに気がついた時に、その嬉しい気持ちを誰にも話せないまま、一人ぼっちになってしまふ。ここに宗教者がいる意味があると思います。キリスト教の牧師さんであろうと、仏教のお坊さんであ

ろつとお坊さんでなかつと、生命は無限のものの中にすでに包まれていると思つてゐる人
のいる意味がここにある お釈迦様の教えに照らして、キリスト者の方はイエス様の教え
に、肉体の状況が凄まじいものであつても心が解放されて、自由な精神的に健康な状況にそ
の方が転換される時に一緒に喜びに与ることができる。

ターミナルケアという言葉が、もし新しい生命への出発点という意味で使うことができ
るなら、そこに宗教者がいる一番大切な意味があると思つています。形あるものにはか価
値を認めない方に、もっと広い世界があること、柔らかい気持ちで如何なる状況の中でも過
ごすことができることを皆様に伝えることが我々の役目なのではなかつかと思ひます。

『大きな生命の中につつまれてゐる』というところを見つて歌つてゐる私の大好きな金子
みずぶさんの詩をご紹介します。九六年前に生まれ、二六才で詩を五〇〇位作つて亡くなら
れた、浄土真宗の土壤に生まれ育つた方です。

『蜂と神さま』

蜂は お花の中に

お花は お庭の中に

お庭は 土塀の中に

土塀は 町の中に

町は 日本の中に

日本は 世界の中に

世界は 神様の中に

そうしてそうして 神様は ちっちゃな蜂の中に

ささやかな経験を話させて頂きました。

Session 4

東京ビハーラの会

田久保 園子さん

- Part II -

11.23 午後

浄土仏教を世界に広められた鈴木鈴木大拙博士のお葬式に、ヨーロッパから来られた神学者が
されたスピーチの中に、「死ぬ前に死んだ人は、死ぬ時には死なない」という聖書の言葉を
引用されたという話しを聞いた。その言葉がずっと私の心にひっかかっている。浄土真宗の
救いとまさに一致している。聖書のどこに書かれているか教えて頂きたい。(ヨハネ一・
二五 二六)

念仏するかどうかではなくて、念仏しようとした瞬間に、信心を得た時にその往生成仏が決まるという。まさに死ぬ前に死んだ人は死ぬ時は死なない。

仏教ではもともと生と死を別けません。裏腹にある生死を繰返し変化しているだけで、変化の過程に誕生のずっと前から、大きい生命の一部分が輪回というか、さまざまな条件によつて、直接の原因は両親が結婚してくれたということですが、どこかの変化の地点を受胎と名付け、誕生と呼ぶ。その後もどんどん変化を続ける。二五才位までを成長とよび、それを過ぎると老化と、形を変えるほどの変化を死と名付ける。しかし、自然のまなざしからみると、ただ変化が起きているだけである。無常という言葉がありますが、すべてのものが変化する諸行無常であります。

質疑応答から

がん患者が死を迎えるまでにたどる経過について

四つのプロセス(怒り、否認、取引、受容)を経て死を迎えるというのが多くの患者のパターンであるというのがキューブラ・ロスの定説になっていますが、パターン

通りにはいかないというのが実感です。私がなんとかしなければ と思っていた時代には焦りもあったが、今はどちらでも良いというのが正直な気持ちです。次の生命にきちんとして引き継いで行くことができれば素晴らしいと思います。

告知の問題について

がんセンターの患者さんは、みな告知されています。病気を隠したり、嘘の病名を告げたりすることは、患者さん自身に良いか悪いかではなくて、人類全体のためにきちんと伝えたいと思います。後に残された遺族に会う機会が多いのですが、一番胸をつかれるのは、うやむやにされた家族と、きちんと生きること死ぬことについて会話をした家族との違いです。変わりつつはありますが、告知の問題は病名を告げることだと誤解されています。

日本の大半は告知しないパーセンテージの方が多いです。生命のことに關して嘘を認めることは、他のことはどんな嘘でも言えることにつながると思います。例えば江藤淳さんの例ですが、奥さんの肺がんを告知せず、脳への転移を脳内出血と嘘を言ったことを、ほめ称えるマスコミや世間がありました。優しく看病し、女性はそのような

に看取られることを望むだろうという記事を読んだのですが、私はノーです。いわゆるインテリという方には宗教的なものを無視する方が多いようです。宗教の本質があなたの思っているものと全く違っているとすればどうするか、弱い心の人がすぎるものだと思っていないか、生きること、死ぬことをどう考えているか聞いてみたい。

告知は拡がっていますが、病名を告げるだけです。説明をすれば二〇〇〇円の手当がつくから、とにかく言うだけです。がん患者の会でも四、五年前までは告知の問題ばかりだったのですが、もう一応解決をみたく思っています。本当の話をしなければ、どこまでも嘘を言うことが良いことだという社会が続いてしまう。どこかで断ち切ろうという働きがありました。患者本人には知らせないで、家族には告知されるケースが一番一般的ではありますが、最初に嘘で始まると後に残された者の不信の拡がりは大きいと思います。一番大切な生命について嘘をつくことは他のことはどんな嘘でもついてよいということにつながるわけです。本当のことを言い続けようという根拠はそこにあります。死で全てが終わるといふ価値観、形あるものしか信じないというのでは人類全体のレベルダウンにつながる。悲しい文化が続くと感じます。

私は患者さんに残された短い人生を有意義に過ごしてもらうことを目的にしています。目の前にいる方であろうと、電話で深刻な話しを聞く時であろうと、私という人間が相手の人間を救うことはできないことです。救うのはまさに限りない生命の方がすでに救ってくださっておるといふことを気づくことが気づくまいと、それはその人のものです。

目的遂行型はシャットアウトされるのです。

キリスト教徒の場合、ローマの信徒の手紙の「聖霊がとりなしてください」神様が祈って下さるといふ信仰：よみがえりの希望を持っているのではないのでしょうか。

Session 5

梅上山光明寺住職

(浄土真宗本願寺派)

石上 和敬 師

11.23 夜



ご紹介にありましたように、葬儀の前後に我々がどのようなことをしているか、若干ご説明と実演をしたいと思えます。何分にも初めてなので要領を得なくなるかもしれませんが、ご容赦いただきます。

まず、お飾りについて説明させていただきます。

正式には莊嚴そうげんと言います。お燈明をあげたり、お花を飾ったりすることをお莊嚴そうげんするといふ。お葬式に柵を作るのを祭壇まつ壇といいますが、正式には莊嚴柵、莊嚴壇まつ壇といふ。仏具屋さんから出た言葉かもしれませんが、よく昔から信は莊嚴そうげんかららからと言い、きちんとした莊嚴を整えてから行います。

お莊嚴について説明いたします。

通常は三具足みつぐそくといい、ろうそく、お花、香炉が三点セットです。報恩講などではろうそく、お花が一对になって五点になるので五具足ごぐそくといい、年に何回かありますが、普通は三具足です。一番大切なのは御本尊様をお飾りすることですが、私たちは阿弥陀如来をおかけするわけです。まず、木像(木彫りの仏像)、絵に書いた(絵像)、もう一つは南無阿弥陀仏と書いた名号なごうをお飾りする、という三通りあります。名号をお参りするのが最も本来的ですが、長い年月の間にお像か絵像を置くことが多くなっています。木像、絵像については我々は方便法身ほうべんぼうしんといえます。本来の仏様は、色もなく、形もまします、言葉も絶えたり」と具体的に表現できるものではないのですが、我々に判り易い形として、仮にこういってお姿をとってくださっているという位置づけを真宗ではしています。これは打敷うちぢといって掛けて使つか用もちいたします。

私の衣装についてご説明します。

下に着ております紫のものを色衣しきえ、黒衣、白のお袈裟を五條袈裟、五條は大きさの単位で、これより大きな七條袈裟というのもあります。袈裟というのは本来はインドのサンスクリット語のカシャーエからきています。茶色、くすんだ色で、それを取り入れて袈裟といっています。粗末なボロ布を縫いあわせて着たものが袈裟の本来の意味であり、日本に入ってきて、段々きれいになってきました。本来の袈裟の意味から離れてきてしまっています。必ず左肩にかけています。七條袈裟などは大きく、複雑になっていますが、基本は左からということです。これはインドの習慣からで、仏様など尊い方に敬意を表して、右を露にし、左を隠すという習慣から来ています。インド人は食べるのは右で、左は不浄の手といって隠します。役割をわけているわけです。仏様の周りをぐるぐる回る作法がありますが、これも時計回りです。右側が仏様の方を向いていて、左側は外側になり、仏様から遠い：仏教とかインドの考え方からきています。

お数珠の玉は一〇八です。一〇八の煩惱を現わしています。

これは中啓ちゆうけいといいますが、意味はよく判りませんが、お経本など大事なものは畳の上に直に置かないなど、大事なものをこれを拡げてこの上に置きます。

これが本山から出ている「葬儀規範集」というものですが、一つの参考に出されています。聖公会の祈禱書を拝見すると病氣の方のお見舞から始まっていますが、これは臨床勤行から始まって、いわゆる枕経まくらづとからです。お勤めといっていますが、正式にはお経をあげることを勤行しんぎょうといっています。

臨床勤行、枕経　は正式には亡くなる前に阿弥陀様のご来迎をむかえるためのものですが、現在では亡くなられたすぐ後伺って、お参りし、枕元であげるものです。昔は夜中に亡くなられたら、夜中に伺って、あげたものですが、最近は葬儀まで数日間が空くような時にはお伺いすることもあるのですが、枕経をあげないこともある。

納棺勤行　文字通り納棺の時にあげるお経ですが、ご自宅で納棺され、お寺など斎場に向かう時にはしないことも多いです。納棺に立ち会うことも少なくなっています。

通夜勤行　お通夜であります。本来は短く、ごく親しい方々だけの儀式だったのですが、最近はお通夜の方が盛大になっています。

出棺勤行　昔は自宅から出るときに仏壇の前で行ったものです。

葬場勤行　山の中などの焼場に行って行うのが本来ですが、最近はお出棺勤行とセツ

トにして行われるものです。途中で一度切れて、二つのものが一つにされています。葬場勤行は基本的には本来は立って行われます。

火屋勤行 現在は火葬場に行つて、茶毘に付すときに行きます。

収骨勤行 お骨を拾うときに行きます。

還骨勤行 お骨が家に帰つて来たときに行きます。現在では繰上げ初七日と一緒になつています。

満中陰 四十九日の法要、インド人の輪回りんねの考え方からきています。人間としての生が終わつて、次の何かに生まれ変わるまで四十九日かかるといふ、中陰が終わるといふ考え方です。浄土真宗では中陰の意味が少し異なりますが、この時に納骨されることが多いです。

全体といたしまして、お参りする時の心得は、ご遺体があつたり、お骨があつたり、お位牌があつたりしても、大事なことは御本尊の阿弥陀様がお参りの対象であるということとす。真宗ではご遺体だけ、お骨だけに対してお参りすることはしません。お墓などにも南無阿弥陀仏と刻むことが多いです。これも一つの特徴かと思ひます。

正信偈しょうしんげを少し唱えてみましょう。通夜の時も、御葬儀の時も使います。かなり長くて三〇分前後かかります。間に本日は誰々さんの葬儀だという和語調のものが入り、終わりに賛仏歌を歌うことにしています。住職によってはテープを流す方も多いです。「恩徳讃」は高低があつて歌いにくい歌ですが、お通夜などではもの悲しい曲です。「み仏にいだかれて」は御葬儀などで使います。このどちらかを一緒に歌つて終わることになっています。

法話のご法事ではいたしますが、私は通夜、葬儀ではしないことにしています。仏教ではお経がメインですので人の出入りの多い時には敢えてしません。還骨の時とか、枕経でご遺族だけの時にいたします。

通夜の意義につて

「葬儀の前夜に近親者や友人、知人など苦楽を共にした人々が仏前にあい集い、故人を追憶して仏恩報謝の念を深め、法義相統の場とする」
仏様（阿弥陀様）の恩に感謝し、
仏様の教えが続いていく場とします。

故人を偲びつつ、あくまでも仏様へのお礼をし、これを縁として信心を深めるといふ二つ

の意味を一つにしています。これは莊嚴の真中に「ご本尊をお飾りすることにも表れています
が、亡くなった方を偲んだり、追憶することと、ご本尊様に感謝の気持ちを捧げて、教えを
受けることのどちらにウエイトを置くかというところに非常に悩みというか難しいところが
あります。ご遺族の方にとってみれば、亡くなられた方を偲ぶ気持ちが圧倒的に強いわけ
ですが、その気持ちを軽んじ、踏みにじってはいけないと思う反面、それだけでは仏教の儀式
として意味がない。亡くなった方をどのように受け止めていったら良いかをしっかりと納
得できてこそ、本当の意味で偲んで行くことになるという宗教的な意義に繋げていくことを
目指したいのです。長い目でみれば二つのことが一つになることが判って頂けると思っ
ますが、亡くなった直後には「ご遺族に対しては難しいと思っています。」

法話について

私は通夜、葬儀のときはしません。還骨勤行、初七日に、その場の雰囲気とかお家にふ
さわしい話をしますが、必ずお話しすることは東本願寺の方が作った言葉ですが、「身内の
方や親しい方の死に会うことは悲しいことである。しかしながら、その死に出会うことか
ら、何ことをも私たちが学ぶことがないなら、もっと悲しいことである。」というものがあ

ります。お別れということが辛い、悲しいということだけで終わってしまったては、亡くなられた方に申し訳ないのではないかと、「こういうことに気がつきなさいよ」ということを言うてくださっているのではないかと。一つでも一つでも味わって最期のお別れをしたらいいかでしょうか。何を学ぶかはそれぞれ皆様のご事情によるでしょうが、後で振り返ったら、あの時からこんな風に考えられるようになったというように、学びの一つとして仏教の教えをより深く味わって頂きたいと思います。

四十九日法要

少し気持ちも落ち着いてきますので、亡くなった方をどのように受け止め、考えたらよいかをお話します。我々の教えでは、亡くなられた方を「仏様」として考え、受け止めると昔から教えられているわけです。これはどついつい意味か。亡くなられた方が「仏様」として、残された我々に『良かれかし』として願っている、亡くなられた方のお気持ちを受け取っていくことではないかと考えられます。この『良かれかし』が、ただ健康でいるとか、仕事がつましく行くということだけではないだろうと思います。仏様の願い、教えに目覚め、味わって行くことも願っていられるのではないかと。

亡くなった方が、どうなるようになるということは言葉の表現としてはあっても、基本的にはどう受け止めるかということが大前提であります。それが唯識ゆいしきということでありまして、われわれが如何に受け止め、考えていくかということが大切なことでもあります。

御文章ごぶんしょう

お文ぶんともいい、本願寺第八代蓮如上人が各地の門徒に宛て書かれた手紙が沢山残っており、ます。これを一通選んでお唱えします。初七日の時にはその中の「白骨の章」を、読む時にはご本尊に向かってではなく皆さんに向かって読み、最後に、あなかしこ、あなかしこで終わります。

Session 6

梅上山光明寺住職

(浄土真宗本願寺派)

石上 和敬 師

- Part II -

11.24 午前

司会者 昨日の話しをさらに発展させて、実際に東京でお働きになって、感じていらっしやること、悩んでいらっしやること、今後への期待、お考えを、特に門徒の方々とのやり取りの中で思っでいらっしやること、体験談、経験談をお話して頂きます。その後我々の現状を踏まえて、あるいは我々の訓練、後輩の育成、教会と社会等々課題も沢山在りますので、互いにシェアしたいと思います。

高橋先生から頂いたレジメにそって話しをさせて頂きます。思いつくままにということになってしまふことをお許し頂きたいと思えます。

門徒さんとかかわりの中で願っていること

我々が門徒の方と接するのは現実的には仏事ということを通してです。仏事は広い意味で、ご法事だけでなく、お彼岸、お盆なども含めて、私たちの所には墓地が境内にありますので、お墓参りという日常的なことを通して仏事と考えています。昨日先祖供養の話が出ていましたが、真宗では追善の供養ではなく、緩やかな意味で先祖供養を通してのお付き合いが多いのです。キリスト教は毎週日曜日毎の礼拝があり、必ずしもご先祖供養と結びつかなくとも、信仰を中心に信者の方と接する場があります。我々の方は幾つか場を設けてはいますが、基本的には仏事を通してということでもあります。

ですから、仏事をどう位置づけるかが課題です。仏事はご先祖を偲び、ご先祖とのふれあいが入り口としてはありますが、その意味をより深めるためには、仏教的には亡くなった方をどう捉えてゆくか、より深い仏教の考え方を少しでも学びとり、感じとって頂ければあり

がたいと思っています。

先祖供養とは別に仏教の勉強会、法話会を月に三、四回開いているが、門徒さんだけでなく、知り合いの方など自由参加の方が熱心です。本来中心になって欲しい門徒さんは、お墓がそこにあつて、いわゆる菩提寺があつて、今までのまま、先祖供養にこだわって考え方が固まっているのかなという気がします。

私の個人的な願いとしては、キリスト教のように日曜日に信者の方が集まって、信仰について深めていく機会が形として設けられると良いなと思いますが、法事が土・日に詰まつていて時間をとることは頑張ってもできにくいのです。勉強会、法話会もウィークデイの昼間、夜という形になります。学校も週休二日制になりますから、少し考えなくてはと思います。土曜学校とか日曜学校をやっていらっしゃるお寺さんもありますが、基本的には法事などの関係できつというのが現状です。

昨日も申し上げましたように、門徒さんとの関係は、仏教という宗教、信仰を伝えてくれる人というよりも、親しい親戚、友人、知人として、寺の者を受けとめてくれているように思います。相談事、困ったことを質問されたりすることは稀です。対等な関係であり、教える立場にはありません。キリスト教のように、聖職の方が信者の方に伝えるという形がきち

んとできていません。お寺ごとに門徒との関係はばらばらです。門徒の方を教え導くという考え方ではなく、まず親しい関係が構築されることが大切でしょう。親鸞上人も言っているように、「仏様の前には皆恥ずかしい存在であることを共有しよう」ということが真宗の教えですから、教え、導くということにならないのは教義的な面からいうと良いことなのかもしれません。そんな風にも思っています。

若い僧としての悩み、今後の期待

仏教の場合、江戸時代からの檀家制度というものが基準になっていますから、これをこれからどのように展開していくのが我々の関心事です。檀家制度はだめになっていくのではないかというご指摘も多々ありますが、ここ一四、五年、父が亡くなって後を継いでから、檀家が離れたりした経験はありません。知人の紹介などでご門徒の数は表面上は増えているので表向きには切実な問題はないのですが、各々のご門徒がどういう風にお寺のこと、仏教のことを考えておられるか、ということとは非常に不安なところであり、わかりません。郊外に引越された方も多く、寺に行くのもよそ行きの格好をして行くようなことが多くなり、物理的な距離が遠くなると、心の距離も離れていくということはあります。

もう一つは、核家族化が進み、なかなか寺とのつきあいの仕方が伝わっていかない不安があります。家々の世代間の連絡が希薄になってきていると感じます。何々家というより、個々に対応していくようにしなければと思います。

浄土真宗に限って言えば、西本願寺系のお寺は、関東全域と静岡県、山梨県まで入れて東京教区を作っており、四二〇〜三〇ヶ寺しかありません。富山県などは富山教区と高岡教区と二つの教区を持ち、それぞれ何百という寺があります。大阪も八〇〇寺位あります。全国から潜在的な門徒は沢山首都圏に入って来られるので、東京のお寺が地方にあつた時と同じような関係をどうやって維持できるか宗門にとっても課題です。

まずお寺の数を増やそうとしています。地方のお寺は広い境内を持ち、そのイメージで都市で始めるのは大変なので、普通の住宅の一室で始められる方もあり、地方から出てこられる方とニーズが一致しなくて難しいのです。

宗門としては地方から出てこられた方を近いお寺がケアし、新しい関係を結べるように努力し、既存のお寺も一緒に考えていかなければと思っています。

住職としての立場からキリスト教を意識する時

門徒の方が結婚されて、お嫁さんがクリスチャンであるとか、門徒の方がクリスチャンになられた時にどのように考えていったらよいか住職として意識します。キリスト教は個々人の信仰が基本で、それが前提としてあるから、考えやすいのかと思います。親鸞上人の原則はそれとして、江戸時代からの檀家制度の中に家単位で考えるようになっていたので、その中にクリスチャンの方がおられた時、我々がどのように接し、寺とどうつきあっていたらよいかは難しい問題です。

私の門徒の中に真宗の儀礼とか、仏事を拒否されるクリスチャンの方はおられないです。一般のご門徒の方と同じように表面的には問題にならないのですが、親しくなった時に、少しでも仏教の話しや勉強会に誘ってみたいけれども、またそついう方こそ誘いたいが、ぴしゃっと断わられたことがあります。

信仰が違うことでお墓に入る、入らないということが出て来るのかもしれない。仮定の問題として相談を請けた時は、残された方が一番困らないうちに、納得行くようにすることが一番良いと考えています。

質疑応答の中から

僧籍のある方は何人ですか

一二〇〇人程……！一年間、京都、東京、広島、大阪にある仏教大学に通う。"京都で二週間の教師研修を経て、得度を受ける 住職になる資格がとれる。# 三年間の通信教育を受けるということになります。禅宗のような厳しい修業はありません。僧籍をもつ三分の一は僧職以外に別の職業を持っている在家の方です。"

日本人の宗教感情についてお考えがありましたら

キリスト教も仏教も最初は外から入ってきたわけですが、その入り方が違います。仏教の中でも、渡来人説と遣唐使説、また日本人が求めて持ち帰ったという伝わり方の違いがあります。また仏教は中国に入った段階で中国なりに変容し、それが日本に入ってからまた日本なりに変容しました。本来の仏教がどう変えられたかという視点でばかりみてしまう傾向がありますが、日本の思想の中でキリスト教、仏教がどう受入れられたかを探る方が意味がありそうな気がします。

都市開教ということについて

一〇万人当たり一ヶ寺を原則としています。仏事を縁として葬儀屋との関係から出発することが多いです。二年間のみ援助があります。

浄土宗と浄土真宗の関係について

他の所とよりは近いが、浄土宗は念仏を行とし、真宗は念仏は報恩感謝とする、という違いがあります。

エキユメニカルな動きについて

個々のお寺が独立しているので、上からの統制力はありません。同じような志を持っている寺同志がプライベートにやっていることを宗旨として応援することはあります。